



現代アメリカ演劇におけるマイノリティ・ポリティクス研究－人種・ジェンダー・セクシュアリティをめぐる二元論的支配言説の攪乱

沖野, 真理香

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2010-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4851

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004851>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	沖野 真理香
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学 位 記 番 号	博い第 4851 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 22 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

現代アメリカ演劇におけるマイノリティ・ポリティクス研究－人種・ジェ ンダー・セクシュアリティ
をめぐる二元論的支配言説の攪乱

審 査 委 員

主 査	教 授	菱川 英一
	教 授	油井 清光
	准教授	山本 秀行
	講 師	桑山 智成
	京都学園大学経済学部教授	古木 圭子

本博士論文では、WASP・男性・異性愛中心主義のアメリカにおいて周縁的な存在、つまり、WASP以外の人種・女性・同性愛者(非異性愛者)を「マイノリティ」と定義し、1970年代から1990年代に初演されたアメリカ・マイノリティ演劇に見られるマイノリティ・ポリティクスについて論じた。

アメリカ社会における、人種マイノリティ、女性、セクシュアル・マイノリティのポリティクスは、それぞれが全く独立して展開してきたわけではない。アメリカにおける婦人参政権運動は奴隷制廃止運動と密接な関係にあり、第二派フェミニズムは公民権運動と関わりあっている。セクシュアリティの多様化に向けての運動にも、公民権運動の影響やフェミニズムの影響がある。アジア系やアフリカ系など人種マイノリティの女性が、女性であるということと人種的マイノリティであることで二重に抑圧されセクシュアル・マイノリティの中でも人種やジェンダーによって複数の抑圧を被る人たちがいる。ゆえに、人種・ジェンダー・セクシュアリティの問題は切り離して論じ難いものを多分に含んでいる。このことから、現代のアメリカにおけるマイノリティ・ポリティクスの全体像は、単一のマイノリティ・グループに偏った研究では見出せないと言える。

本博士論文の独自性は、1人の劇作家や単一のマイノリティ・グループの演劇だけでなく、複数のマイノリティ・グループの演劇について人種・ジェンダー・セクシュアリティの観点から考察した点にある。現代アメリカ演劇におけるマイノリティ・ポリティクス研究は、未だに単一のマイノリティ演劇に焦点を絞ったものが多い。「マイノリティの重層性」や、それによる複合的な差別問題について論じる演劇研究はまだまだ発展の途上にある。本博士論文では、人種・ジェンダー・セクシュアリティのそれぞれをテーマに扱った代表的な劇作品を分析し、マイノリティ演劇全体に共通するポリティクスを追究することで、これまでの演劇研究では見えにくかったマイノリティの重層性を見出すことを目標とした。また、劇中で二元論的支配言説を攪乱させることが、現代演劇におけるマイノリティのポリティクスとして機能していることを検証した。これまでのアメリカ・マイノリティ演劇研究には複数のマイノリティ演劇における攪乱現象に注目したものはない。それぞれのマイノリティ演劇作品にみられる逆転や転覆の現象に焦点を当てることで、アメリカ社会のマイノリティを生み出してきた二元論的支配言説の消滅が現代アメリカ演劇におけるマイノリティ・ポリティクスの訴えであることを明らかにすることも目標とした。

第I部では、主に人種マイノリティをめぐる問題をテーマに描いた劇作品について論じた。具体的には、現代アメリカ演劇の人種マイノリティ劇作家を代表するアフリカ系の Suzan-Lori Parks とアジア系の David Henry Hwang の作品を分析し、劇中の人種にもとづく支配関係の攪乱を分析した。Parks の *Venus* では、実在の人物をモデルにした主人公 Venus が登場し、アフリカ人である彼女は白人社会で見世物として扱われる。この劇では劇中劇やフリーク・ショーが舞台で行われることにより、観客に

「見る(観る)」という行為を強く意識させる。*Venus* はアフリカ人であることで白人に他者化され、女性であることで男性に他者化され、二重に視線の暴力に晒される。だが、彼女は自ら「見る」主体となることで、「見る者」と「視られる者」の立場を転覆させる。つまり、*Venus* では、アフリカ人女性 Venus によって白人/有色人種、男/女の二元論的な支配関係が攪乱されるのである。Hwang の *M. Butterfly* では、ジェンダー化されたオリエンタリズムの概念が問題となっている。西洋による東洋の他者化は、男/女の支配関係と結びついている。それによって東洋は女性的だと見なされ、男性的な西洋に抑圧されてきた。中国人男性 Song は西洋男性が支配的欲望を充足させるために憧れるステレオタイプの東洋女性を演じ、フランス人 Gallimard をだまし続けることで、西洋/東洋の支配関係を覆す。また、異性装の Song によって男/女、異性愛/同性愛の境界があいまいになる。*Venus* と *M. Butterfly* では共通して、支配する側と支配される側の支配関係が逆転し、二元論的支配言説が消滅し得ることを伝える。

第II部では、キューバ出身の Maria Irene Fornes の女性の問題を扱っている作品について論じた。取り上げた2作品とも1つの家の中で起こる出来事を描き、家父長的な女性抑圧の問題を前景化する。*Fefu and Her Friends* には女性だけが登場し、精神医学が象徴する男性支配によって女性が狂気として他者化されてきた問題を描いている。ジェンダーの社会規範から逸脱しているようにみえる主人公 Fefu の言動や、セクシュアリティの社会規範から逸脱しているような女性たちの結びつきは、男/女、異性愛/同性愛の境界を揺るがす。*Mud* では、男/女の支配関係の転覆は「知」によってもたらされる。この劇では、男性が自らの家父長的権力を維持できなくなることへの恐怖が見て取れることから、女性だけでなく男性もまた男/女の支配関係の基盤となる家父長制の犠牲者であることが分かる。さらに *Mud* の登場人物は移民である可能性があり、アメリカ社会における人種や民族の差別問題と家の中の男/女の支配関係の複合的な問題を読み取ることができる。移民であることで、女性により強い家父長的支配のもとに置かれ、その支配から逃れることが一層難しい。しかしながら、Fornes は特殊な演出方法で観客を舞台空間の中に取り込み、男性による支配、または、重層的な支配の構造から女性がいかに脱却できるのかを、観客自らが考えるように導くのである。

第III部では、セクシュアル・マイノリティの人々を描いた作品について論じた。具体的には4作品における異性愛/非異性愛の二項対立の攪乱を、クィア理論を用いて考察した。ゲイのユダヤ系劇作家 Tony Kushner の *Angels in America* では終盤、人種や民族、ジェンダー、セクシュアリティに関わらずに人々が集い、クィアの非異性愛者だけで形成されるコミュニティをも超えたコミュニティが形成される。舞台上に様々な人種や民族、ジェンダー、セクシュアリティの人物が登場するこの劇は、そのようなコミュニティを形成することで、差別の原因となる境界を取り除いて人々が結びついていくことの重要性を訴えている。アイルランド系の Mart Crowley の *The Boys in the Band* は、今日のゲイ演劇

に影響を与えてきた。この作品におけるゲイ・コミュニティが表象するセクシュアル・マイノリティ同士の強い連帯感は、クィアにおける非異性愛者による連帯に繋がるものがある。また、*The Boys in the Band* のゲイ・コミュニティには人種差を越えた繋がりがある点も、現代的なクィアが目指すコミュニティと共通する。また、異性愛者か同性愛者か明確に区別できない Alan の存在は、異性愛／非異性愛の間の境界をあいまいにする点で攪乱的である。アジア系の Diana Son の *Stop Kiss* で描かれる 2 人の関係は、異性愛と同性愛の境界が実際のところはあいまいであり、誰もが何かのきっかけでマイノリティとして周縁化されてしまう危険性を暴露する。そして、マイノリティに対する暴力的な抑圧に直面しても、政治的な主体としてその抑圧に抵抗の姿勢を見せることの重要性を訴えている。ロック・ミュージカル *Hedwig and the Angry Inch* におけるアイデンティティの問題は、1990 年代にセクシュアル・マイノリティの解放を手伝ってきたクィアの問題点を浮き彫りにする。男／女、冷戦期の西側諸国／東側諸国の境界を越える主人公 Hedwig は、実際にはそれらの二元論に捉われている。しかし、Hedwig は劇の終盤、いかなる二元論的支配言説にも捉われずに自分自身に向き合うことが、1 人の人間としての自分自身を確立するために必要であると気付く。そしてそのような Hedwig の態度は、ヘテロ対クィアの関係に陥ってしまいがちなクィアの理論と実践に、個人のアイデンティティを問うことの必要性を投げかけるのである。これらの作品では、アメリカにおけるセクシュアリティの社会規範が攪乱されると同時に、あらゆる支配言説からの脱却が示唆される。

本博士論文では以上のように、第 I 部に人種マイノリティ、第 II 部に女性、第 III 部にセクシュアル・マイノリティの問題について書かれた劇を分類して論じてきた。しかしながら、これまで考察してきたことから分かるように、それぞれのマイノリティの問題は、他のマイノリティの問題と絡み合い、複合的な差別や重層的なマイノリティを生み出してきた。そして、本博士論文で扱った劇作品すべてに、マイノリティの重層性や複合的差別の問題を見出すことができた。言い換えれば、現代アメリカにおけるマイノリティ演劇はその多くがマイノリティの重層的な問題を描いているのである。

そして、演劇の場で表出されるマイノリティ・ポリティクスとして、劇中ではマイノリティを生みだし抑圧してきたアメリカ社会の二元論的支配言説の攪乱が描かれる。アメリカ社会における WASP／WASP 以外の人種・民族、男／女、異性愛／非異性愛の二項対立はマイノリティ演劇の中で転覆され、それらにもとづいた支配構造が攪乱される。言い換えれば、それらの攪乱現象は、多くのマイノリティの人々が抱える重層的な問題を打破するために現代アメリカ演劇の場で示されるマイノリティ・ポリティクスなのである。そして、この攪乱は決してマイノリティの人々が自分たちを抑圧してきた人種・ジェンダー・セクシュアリティにもとづく支配関係を逆転させ、自分たちの属性の優位性を誇示するためのものではない。そうすれば、また別の二元論が構築され、別のマイノリティが生み出されてしまうこ

とになるからである。この二元論的支配言説の攪乱の目的は、その支配言説の基盤となる階層秩序そのものを問題視することにある。そして、マイノリティの人々だけでなく、今までマジョリティの側にいた人々にも、自分たちが所属する社会の支配構造が本質的なものではなく、構築的で不安定なものに他ならないことを気付かせるのである。

論文審査の結果の要旨

氏 名	沖野 真理香
論 文 題 目	現代アメリカ演劇におけるマイノリティ・ポリティクス研究—人種・ジェンダー・セクシュアリティをめぐる二元論的支配言説の攪乱
要 旨	
本論文は、WASP・男性・異性愛中心主義のアメリカにおいて周縁的な存在、すなわち、WASP 以外の人種・女性・同性愛者(非異性愛者)を「マイノリティ」と定義し、1970 年代から 1990 年代に初演されたアメリカ・マイノリティ演劇に見られるマイノリティ・ポリティクスについて論じたものである。 第 I 部では、主に人種マイノリティをめぐる問題をテーマに描いた劇作品について論じている。第 1 章では、アフリカ系の Suzan-Lori Parks の劇 <i>Venus</i> における劇中の人種にもとづく支配関係の攪乱を分析している。Parks の <i>Venus</i> では、実在の人物をモデルにした主人公 Venus が登場し、アフリカ人である彼女は白人社会で見世物として扱われる。この劇では劇中劇やフリーク・ショーが舞台で行われることにより、観客に「見る(観る)」という行為を強く意識させる。Venus はアフリカ人であることで白人に他者化され、女性であることで男性に他者化され、二重に視線の暴力に晒される。だが、彼女は自ら「見る」主体となることで、「見る者」と「視られる者」の立場を転覆させる。つまり、<i>Venus</i> では、アフリカ人女性 Venus によって白人/有色人種、男/女の二元論的な支配関係が攪乱されると指摘する。第 2 章では、アジア系の David Henry Hwang の <i>M. Butterfly</i> を分析している。Hwang の <i>M. Butterfly</i> では、ジェンダー化されたオリエンタリズムの概念が問題となっている。西洋による東洋の他者化は、男/女の支配関係と結びついている。それによって東洋は女性的だと見なされ、男性的な西洋に抑圧されてきた。中国人男性 Song は西洋男性が支配的欲望を充足させるために憧れるステレオタイプの東洋女性を演じ、フランス人 Gallimard をだまし続けることで、西洋/東洋の支配関係を覆す。また、異性装の Song によって男/女、異性愛/同性愛の境界が曖昧化されていることを看破している。 第 II 部では、ジェンダー・マイノリティとしての女性抑圧の問題を扱っているキューバ出身の Maria Irene Fornes の 2 作品について論じている。第 3 章では、<i>Fefu and Her Friends</i> には女性だけが登場し、精神医学が象徴する男性支配によって女性が狂気として他者化されてきた問題を描いていることを明らかにしている。ジェンダーの社会規範から逸脱しているようにみえる主人公 Fefu の言動や、セクシュアリティの社会規範から逸脱しているような女性たちの結びつきは、男/女、異性愛/同性愛の境界を揺るがす。第 4 章では、<i>Mud</i> における「知」によってもたらされ男/女の支配関係の転覆を論じている。さらに、<i>Mud</i> の中にアメリカ社会における人種や民族の差別問題と家の中の男/女の支配関係の複合的な問題、すなわち、移民であることで、女性はより強い家父長的支配のもとに置かれ、その支配から逃れることが一層難しいことを指摘している。 第 III 部では、セクシュアル・マイノリティの人々を描いた 4 作品における異性愛/非異性愛の二項対立の攪乱を、クィア理論を用いて考察している。第 5 章では、ゲイのユダヤ系劇作家 Tony Kushner の <i>Angels in America</i> において、人種や民族、ジェンダー、セクシュアリティに関わらずに人々が集い、クィアの非異性愛者だけで形成されるコミュニティをも超えたコミュニティが形成されることを指摘している。舞台上に様々な人種や民族、ジェンダー、セクシュアリティの人物が登場するこの劇に、そのようなコミュニティを形成することで、差別の原因となる境界を取り除いて人々が結びついていくことの重要性を訴えているという立場を見出している。第 6 章では、今日のゲイ演劇に影響を与えてきたアイルランド系の Mart Crowley の <i>The Boys in the Band</i> を論じている。この作品におけるゲイ・コミュニティが表象するセクシュアル・マイノリティ同士の強い連帯感とは、クィアにおける非異性愛者	
主 査 記 載 氏 名 ・ 印	菱川 英一

による連帯に繋がるものがあり、また、*The Boys in the Band* のゲイ・コミュニティには人種差を越えた繋がりがあある点も、現代的なクィアが目指すコミュニティと共通することを指摘している。第 7 章では、アジア系の Diana Son の *Stop Kiss* で描かれる 2 人の女性同士の関係が、異性愛と同性愛の境界が実際のところは曖昧であり、誰もが何かのきっかけでマイノリティとして周縁化されてしまう危険性を暴露する。そして、それは、マイノリティに対する暴力的な抑圧に直面しても、政治的な主体としてその抑圧に抵抗の姿勢を見せることの重要性を訴えているものだと論じている。第 8 章では、ロック・ミュージカル *Hedwig and the Angry Inch* におけるアイデンティティの問題が、1990 年代にセクシュアル・マイノリティ解放に寄与した新たな概念であるクィアの問題点を浮き彫りにすることを論証している。男/女、冷戦期の西側諸国/東側諸国の境界を越える主人公 Hedwig は、実際にはそれらの二元論に捉われているが、劇の終盤、いかなる二元論的支配言説にも捉われずに自分自身に向き合うことが、一人の人間としての自分自身を確立するために必要であると気付く。そうした Hedwig の態度は、ヘテロ対クィアの関係に陥ってしまいがちなクィア理論とその実践に、個人のアイデンティティを問うことの必要性を投げ掛けるものであるとしている。さらにこの作品では、アメリカにおけるセクシュアリティの社会規範が攪乱されると同時に、あらゆる支配言説からの脱却が示唆されていると主張する。

本論文の「結論」では、マイノリティの演劇における二元論的支配言説の攪乱の目的は、その支配言説の基盤となる階層秩序そのものを問題視することにある、そして、マイノリティの側だけでなく、今までマジョリティの側にいた人々にも、自分たちが所属する社会の支配構造が本質的なものではなく、構築的で不安定なものに他ならないことを気付かせることにあるという明確な見解を披瀝している。

本論文の独自性は、一人の劇作家や単一のマイノリティ・グループの演劇だけでなく、複数のマイノリティ・グループの演劇について人種・ジェンダー・セクシュアリティの観点から考察した点にある。本論文は、人種・ジェンダー・セクシュアリティのそれぞれをテーマに扱った代表的な劇作品を分析し、マイノリティ演劇全体に共通するポリティクスを追究することで、これまでの演劇研究では見えにくかったマイノリティの重層性を見出すことに成功している。また、マイノリティ演劇作品にみられる逆転や転覆の現象に焦点を当てることで、劇中における二元論的支配言説の攪乱が現代演劇におけるマイノリティのポリティクスとして機能していること、劇中におけるクィア社会のマイノリティを生み出してきた二元論的支配言説の消滅こそが現代アメリカ演劇におけるマイノリティ・ポリティクスの目標であることを、最近のフェミニズム・ジェンダー理論に基づくテキスト研究により実証している点は評価に値する。

なお、本論文の中心をなす内容については、すでに日本アメリカ文学学会全国大会、日本アメリカ学会年次大会、日本英文学会関西支部大会、アジア系アメリカ文学研究会、全国アメリカ演劇研究者会議等で口頭発表をし、評価を受けていることも付言しておく。

以上に鑑み、本審査委員会は全員一致で、論文提出者、沖野真理香が博士(学術)の学位を授与されるに足る資格を有するものと判断した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	菱川 英一	副 査	教授	油井 清光
副 査	准教授	山本 秀行	副 査	講師	桑山 智成
副 査	京都学園大・教授	古木 圭子	}		